

漁民の伝えた致富譚

「蛸長者」の昔話

大 嶋 善 孝

はじめに

本稿は『日本昔話大成』(以下『大成』と呼ぶ)では「蛸長者」、
『日本昔話通観』(以下『通観』と呼ぶ)では「たこ取り長者」と呼
ばれる昔話を取り上げ、その歴史的・社会的な背景を考察するもの
である。この昔話については、すでに関敬吾や岩瀬博によって、そ
の伝播経路についての指摘があるが、本稿ではこれをより詳細に論
じたい。

この昔話は、貧しい蛸取りや漁師や魚屋が、偶然によって(ある
いは機知を働かせて)長者の娘にもらう。男と嫁が(あるいは嫁だ
けが)化物屋敷を借りて生活していると化物が出る。化物の現われ
た場所や化物が教えた場所を掘ると金が見付かり、男は金持になる
というものである。

一、事例と分布

この昔話は、管見によれば三三例が知られている。なお、昔話の
形態は同一でも、主人公の男の職業が蛸取りや魚屋ではない事例も
いくつかあるが、本稿ではそうしたものは「蛸長者」として扱わな
いこととした。

ところで、類似した事例が複数の資料集に掲載されている場合、
それが同一のものか別のものか簡単には判断できない場合がある。
そこで、そうした混乱が生じないように伝承地だけでなく、語り手
の氏名が分かる場合はそれを示した。また、原典に当たって確認す
る場合の便宜を考慮して、同一の事例が複数の資料集(昔話集、民
話集など)に掲載されている場合、注には筆者の確認した原典をす
べてあげてページも記載したほか、編著者と採話者が異なってい
て採話者が明らかかな場合には採話者も記載した。また、次のような注
記もする。

○ 『大成』に内容を所載

□ 『大成』に典故のみを所載

△ 『大成』に所載されず

● 『通観』に内容を所載

■ 『通観』の『第二七巻補遺』に典故のみを所載

▲ 『通観』に所載されず

〔事例一〕 青森県三戸郡田子町上郷 ○ ●

鮎ばかり取っているので鮎屋久兵衛と呼ばれる男が、長者から嫁を貰い、大きな寺を借りる。嫁がすすめるので化物が出るという土蔵を開けると金がある。

〔事例二〕 青森県三戸郡五戸町―新井山りせ ○ ●

父親と息子が掘立小屋で鮎を釣って暮らしている。父親が旅先の城下町で泊まった家の妹娘が息子の嫁にして欲しいと頼む。父親は鮎屋長兵衛と名乗る。妹娘は立派な嫁入り支度をして来るが、嫁入り支度の置場もないので古い空き家を借りる。嫁が一人で留守番をしていると化物が出る。化物は屋敷の西の隅に埋まっている金だといいい、掘ると金が入った甕があり、鮎屋長兵衛は長者になる。

〔事例三〕 青森県八戸市鍛冶町 ○ ●

大坂の鮎左衛門という魚屋が、江戸に出て魚を売っている。鮎左衛門は江戸で一番の金持を嫁に貰うことになり、化物屋敷に嫁を迎える。鮎左衛門が商売に行つて嫁が留守番をしていると、夜に化物が出て、蔵の前を掘るように言う。戻つて来た鮎左衛門とともに掘

ると金が何百万両と出て、金持ちになる。そこは鴻ノ池の屋敷だった。

〔事例四〕 青森県下北郡脇野沢村―寺田多つ △ ▲

鮎ばかり釣っている鮎総次郎という貧乏人が、大坂の鴻池に鮎を釣りに行くと、鴻池の嫁が総次郎を好きになる。総次郎は化物屋敷を借りて娘を嫁に迎え金持ちになる。

〔事例五〕 青森市油川―増川のおど □ ▲

鮎釣長兵衛は鮎を釣って暮らしている。村の者たちと上方見物に行き、鴻池にも行く。長兵衛は鴻池で何を見ても感心しない。鴻池では、長者だから感心しないと考え、妹娘を嫁にやるという。嫁の荷物が多いので、嫁は無住の寺を借りて暮らす。長兵衛の留守に化物が出る。長兵衛と嫁が化物の跡を付けると本堂の床下で消えており、掘ると大判・小判の入った瓶がある。

〔事例六〕 青森県西津軽郡木造町土滝―山口タマ △ ●

忠兵衛は家がないので岩穴に住み、鮎をとっている。世話する人がいて金持ちの娘を嫁にもらい、化物が出るという空き家で暮らす。夜に化物が出て、すごい音がする。化物は嫁と問答して、床の間の柱の下の金壺だといふ。金壺を掘り出して金持ちになる。

〔事例七〕 青森県弘前市 △ ●

津軽の外ヶ浜に鮎賀与四郎という貧乏で鮎を捕って小屋に暮らす漁師がいる。金が出来たので伊勢まいりに行き、景気良く金を使うと、長者の娘に見染められる。与四郎は、家には大船三艘と鮎壺三〇〇があり、家の造りは柱はしたん・こくたん、屋根はこがね葺き、

寝ながら月日が拝めると言う。娘は道具を船に積んで嫁に来ると、小屋にボロを着た与四郎がいる。与四郎は娘の親元からの金で大きい漁を計画し、長者になる。

〔事例八〕 青森県南津軽郡常盤村水木 △●

蛸を取る蛸丈という男が、金持ちの娘を嫁にもらいに行く。家の前の川が濁っているのは自分の家の米のとき汁だと言う。嫁の持参金で古い家を買うと、三人の坊主が出て、床の間の下に瓶が三つ埋まっていると言う。掘ると金瓶が三つ出る。

〔事例九〕 岩手県下閉伊郡岩泉町一芋坪ヨシ △▲

海岸にばあさまと男の子がいて、蛸ばかり食べているので蛸屋加左エ門と言われる。海から銭の入った財布を拾い、日本一の長者の娘をもらいに行くと、羽織袴で来いと言われ、金をはたいて買う。

たくさん道具を持って嫁が来たので、化物屋敷を借りる。夜に隅から女の子が出て来る。巫女が金屋敷だと言う。掘ると大判小判の甕が出る。

〔事例一〇〕 秋田県男鹿市船川港―泉リサ △●

蛸取り長兵衛は蛸を取って売り歩いている。大きな家に娘をやるという看板が掛かっている。「寝ていて朝日夕日拜んでいる」と言っていると、娘はあばら家に嫁に来る。嫁が大きな家を買って留守番をしていると、化物が来るが、嫁は平気である。老女が来て奥座敷に連れて行き、床下を見ると瓶に金が入っている。嫁と夫は一生安楽に暮らす。

〔事例一一〕 秋田県男鹿市加茂青砂―大友さわ △●

浜に小屋掛けしている蛸屋長兵衛に大阪の鴻池から千石船にいっぱい物を積んで嫁が来る。嫁は化物が出るという大きな空き家を買う。夜、夫が蛸を取っている間、嫁が一人していると、六尺坊主が三人出るので、茶を飲まず。三人は、瓶の中の白金・黒金・赤金だから掘れと言う。掘ると瓶に金がいっぱい入っている。

〔事例一二〕 新潟県佐渡郡畑野村―岩井キサ ○●

家も屋敷もない越後の蛸屋という者が、鴻池に行き娘に欲しいと言うと、姉をくれるという。蛸屋八兵衛という帆を新造船に立てて迎えに行き、空き屋敷に住む。夜、嫁が一人していると、米の魂や金倉の魂が現れる。倉には米や金があり、繁盛する。

〔事例一三〕 新潟県佐渡郡相川町五十浦 □●

蛸取り長兵衛は大坂に嫁がしに行き、鴻池の娘に気に入られる。長兵衛は化物が出るという屋敷を借りて、嫁を迎える。夜中になると鬼が出るが、鬼は金の神である。長兵衛が大黒柱の下を掘ると大判が出て、鴻池に負けない金持ちになる。

〔事例一四〕 新潟県佐渡郡相川町―古野スエ ○●

大坂の鴻池で「この娘を嫁にほしい者は高札について来い。」という高札を立てると、四国の蛸屋惣左衛門という貧乏人が来る。惣左衛門が「四十三ばい、蛸じるしの船を海中へはなしている」と言っていると、鴻池はだまされ娘をやるという。千石船に荷物をのせ娘が来る。空き家を借り、娘が三晩泊まると、赤鬼と青鬼と黒鬼が出る。鬼たちが蔵の前で姿を消すので、蔵をあけると着物や金銀や俵がいっぱいある。

〔事例一五〕 新潟県長岡市上前島町―青柳トウ □ ●

浜にたこつり権兵衛という貧乏な男がいる。仲人が大阪の鴻池に権兵衛を大金持ちだと言って娘が嫁に来ることになる。親が娘を連れて来ると、小さい小屋に住んでいるが、娘は嫁になると言う。嫁入り道具が多いので化物屋敷を借りる。夜になると化物が出るので、権兵衛がOutcomeして嫁が残っていると、化物が床の間の下に金瓶が埋めてあると言う。掘ると金瓶が出て、長者になる。^(二七)

〔事例一六〕 新潟県西蒲原郡巻町角田浜―篠田ソメ ○ ●

浜に蛸を取るのが上手な男がいる。男は大阪の鴻池から嫁を買って来る。荷物を運んで来た番頭は、男が浜に小屋掛けしているのを見て嫁にやれないと言うが、嫁はここに居ると言う。空き寺で祝言をすると夜中に真白い髭のじいさんが現れ、縁の下に大判小判が埋まっていると言う。男はそこを掘り、村一番の金持ちになる。^(二八)

〔事例一七〕 新潟県見附市葛巻―戸羽きち △ ●

蛸突権兵衛という蛸を取るのを仕事にしている男がいる。金を借りて大阪の鴻池に行き、越後の蛸突権兵衛という大尺だという。鴻池は、大尺ならば娘をやるという。権兵衛は国に帰り、化物が出るという空き寺を借りる。夜に嫁が一人でいると、化物が出るが、嫁は平気である。化物は自分は寺の裏に埋まっている金甕で、度胸が良いからお前に授けると言う。掘ると大きな甕に金が入っていて、蛸突権兵衛は長者になる。^(二九)

〔事例一八〕 新潟県新発田市虎丸―佐藤タマ △ ●

浜にじいさと伴が小屋がけして住んでいる。じいさは上方まいり

に行き、大坂の鴻池の前を通ったとき乳母が赤ん坊を抱いているのをあやしておもちゃをやる。鴻池の主人はじいさに、娘を嫁にやるという。村に帰って長者の跡の空家を借りる。嫁どりの後、嫁が一人でいると、小判の形の顔の女が出て来て、奥座敷の床の間で消える。床の間の板をはぐと、大判小判が埋められていく。^(三〇)

〔事例一九〕 新潟県五泉市赤海―落合ミテ △ ●

魚取りの父子がいる。父親が琴平参りに行く途中、金持ちの家があり、娘が二人いる。父親が一人を嫁に欲しいと言うと、妹が嫁に来ることになる。化物が出るという土蔵を借りる。父子が夜に魚取りに行っている間に嫁だけが家にいると、化物が出る。床下や井戸を掘ると、金瓶が出て父子は大金持ちになる。^(三一)

〔事例二〇〕 新潟県中蒲原郡村松町下大蒲原―桐生ノブ △ ●

蛸四郎兵衛という魚屋の小僧が蛸を売り歩いていて、庄屋の一人娘が嫁に来る。夜、嫁が一人で家にいると、お化けが出て、柱の下を掘るように言う。掘ると大判や小判の入った瓶が見つかり、二人は金持ちになる。^(三二)

〔事例二一〕 新潟県栃尾市二つ郷屋 △ ●

東京の隅田川のたこ取りのたこじゅう。友人が大阪の大金持ちの九兵衛をだまして婚礼の話をまとめる。娘が化け物屋敷で書物を見つけて読んでみると夕立が降りはじめ、鬼が出てくる。鬼は嫁の勇気に感心し、その家の財産を与える。^(三三)

〔事例二二〕 群馬県沼田市岡谷町―細川にき □ ●

越後の野積ヶ浜に蛸をとっている蛸屋金兵衛という男がいる。奥

州の本間久郎という長者に正月十五日に白髪のじいさんが現れ、娘を野積ヶ浜の蛸屋金兵衛という長者に世話するというので、娘と父親が七隻の船に荷物を積んで野積ヶ浜に着くと、金兵衛は小屋に住んでいる。金兵衛は空き家の長者屋敷に荷物を運び込み、嫁と荷物の番をする。二人がいろいろで火を焚くと、夜中に家の隅から女が四人出て来て、柱の下の金の甕なので掘り出すように頼む。掘ると甕が出て、金兵衛は長者になる。^(二四)

〔事例二三〕 長野県下水内郡栄村―上倉きわ □ ●

新潟に蛸屋というのがある。その庭はきじいさが掛け集めに大坂に行き、鴻池で子供に小判をおもちゃに与える。鴻池では蛸屋を金持ちだと思いい嫁にやるといふ。嫁が来るが、蛸屋には息子がいないので、庭はきじいさの息子の嫁になる。嫁は化物屋敷に行き金神に出会って金銀を授かる。庭はきじいさの家は鴻池や蛸屋より金持ちになる。^(二五)

〔事例二四〕 島根県隠岐郡西郷町 △ ●

蛸をとっている蛸屋儀平という爺と息子がいる。爺は伊勢に参宮し、貯めた百両を寄付する。これを見た鴻池が爺を金持ちと思いい、大阪の家に連れて帰る。爺が息子の嫁に娘が欲しいと言うと、嫁にやるといふ。嫁が来ると、化物が出るという大きな家を買って移り、糸車を回していると、土蔵から赤い衣と白い衣の一寸法師が出て来る。人形の後をつけると、倉の下に入る。そこを掘ると小判や銀の入った壺がある。^(二六)

〔事例二五〕 島根県隠岐郡海士町保々見―川西茂彦 ○ ●

蛸屋治兵衛の息子は貧乏だが、大漁だったので、父親に伊勢参りをさせる。蛸屋は参宮の途中で鴻池の旦那に会い、息子の自慢をする。参宮の後、蛸屋は大阪の鴻池に寄り、金毘羅参りの後、再び鴻池に寄る。鴻池の旦那は、娘を蛸屋の息子の嫁にやるといふ。嫁が来ると、息子は蛸取りの職業を変えたいと言いが、娘は変えてはいけないと言ふ。鴻池が資本を出し、現在の蛸壺漁を始めて繁盛する。(語り手の妻の付け加えとして―嫁が糸をつむいでいると、デコが踊っているので不思議に思っていると、デコが床に上がって、千両箱が二つ並ぶ。それから、蛸屋治兵衛の家は良くなる。)^(二七)

〔事例二六〕 島根県隠岐郡知夫村―前横ヨキ △ ●

蛸取りをしている蛸屋八兵衛は貧乏である。金を貯めてぼろを着て旅に出る。大阪の天王寺で金の茶釜を奉納すると評判になり、長者が娘から嫁をやるといふ。帰った男は新宅の大きい家を借り「蛸屋八兵衛」という表札を掛ける。新宅で婚礼をして、男はもとの家に戻る。夜、娘が一人で寝ているとガーンという音がする。男は怖くて漁に出る。嫁が「性のあるものか、ないものか」と言うと、「金の神だ、部屋の下を掘れ」と言ふ。掘ると壺いっぱい金の金がある。娘の福相で金の神がついて来たのだ。^(二八)

〔事例二七〕 島根県美濃郡匹見町岡本―栗田茂 △ ●

いりこ屋才助という、貧乏ないりこ売りがいる。弘法様のお堂が建つときに、その日のいりこの売上を全部寄付する。その金額が一番多かったので、鴻池が才助に身代を尋ねると、才助は九文も九銭もないと答える。鴻池は九万九千と聞き間違え、娘を嫁にやるとい

う。幽霊が出るという家を借りて祝言をする。幽霊が出るので、女房をその家に置いたまま才助は自分の小屋に戻ってしまふ。幽霊は寝間に金があると嫁に言う。寝間には小判が九万九千円ある。^(二九)

【事例二八】 香川県佐柳島 ○●

大阪の鴻池の旦那と兵庫の章魚縄取りのおやじが、金毘羅参りていっしょになる。おやじが、つぼが千あると言うと、鴻池は千坪と
思い、「ごまんの柱にかやの屋根、月星をながめる」と言うと、五万も柱があると思う。おやじは、息子の嫁に鴻池の娘をもらう約束をして、北風という家だと名乗る。娘が千石船に簞笥七棹を載せて嫁に来ると、北風の家は胡麻の柱で章魚壺が千壺並んでいるだけ。娘の持つて来た金で商売を始めて、千石船を四十八はしも持つ長者となる。^(三〇)

【事例二九】 香川県三豊郡詫間町 ▲▲

播磨の伏見に蛸壺六〇個ぐらいで漁師をしているので、つぼ六と呼ばれる貧しい漁師がいる。つぼ六は、年に一回は伊勢参りに行き、いつもすみのくらの旦那と一緒にいる。すみのくらの旦那の娘が嫁に来ることになる。嫁に来た娘はつぼ六が貧乏なので驚くが、父親が決めたことなので嫁になる。^(三一)

【事例三〇】 徳島県三好郡井川町井内谷西の浦—藤本ヒデ ○●

たこやへいざという貧乏な蛸釣がいる。長者の娘が嫁に来る夢を見て、へいざは仲人に頼みに行く。長者にも娘がいて、仲人へ頼みに来る。仲人の口ききで長者の娘が嫁に来ることになる。へいざは化物屋敷を買って住んでいる。娘はたくさん小判を持って嫁に行く。

へいざは小判で大きい家を建て、小判を使ってしまったので、昆布を一船こしらえ嫁の実家に行く、昆布は高いのによく一船持って来た^(三二)と、長者も驚く。

【事例三一】 愛媛県温泉郡 ○●

蛸屋惣兵衛は貧乏人で蛸壺で蛸を取り蛸ばかり食っている。金を貯え伊勢参りに行き鴻池の娘に見そめられる。蛸屋は家には「仕方わり三ばい壺三百、家はごまんの柱にこもくの屋根、寝ていて月日が拜まれる」とほらを吹く。娘はお伊勢様に簪を授けてもらいに来たとい、夫婦約束をする。娘が行くとほろを着た惣兵衛が小屋にいる。神の授けた縁だと祝言をする。鴻池から金が来て分限者になる。^(三三)

【事例三二】 長崎県対馬 ▲■

筑前宮崎の蛸壺屋八兵衛は蛸壺で蛸をとっている。八兵衛が京都に行き、染物屋に「幾壺持っているか」と聞かれ、「一日に百壺くらい使っている」と答えると、染物屋は八兵衛を大きな染物屋と思い、おかねという娘を嫁にやるという。娘は嫁に来て、八兵衛と染物屋を始める。今の筑前絞りを茜絞りと云のは、それは娘の名のおかね絞りだった。父親が来ると、百軒分ののれんを作り町内にかける。^(三四)父親はそれを見て安心する。

【事例三三】 鹿児島県種子島(西之表市上石寺)—遠藤友二 ▲■

蛸取り長兵衛という者は、だまして長者の娘を嫁にもらい、化物が出るという空き家に住む。夜に化物が出るが、家の四方の隅を掘ると甕に大判・小判が入っており、分限者になる。^(三五)

分布についてまず気が付くのは、佐渡と隠岐に各三例、香川県佐柳島と対馬と種子島に各一例というように海岸部に多く分布していることである。もちろん、事例七・一五・二二・二三のように明らかに内陸部と思われる地点にも分布するが、おおよその傾向としては海岸部に分布が片寄っている言えよう。

また、三三例のうち、青森県に八例、秋田県に二例、新潟県に一例、島根県に四例と津軽海峡沿岸から日本海沿岸にかけて集中していると同時に、愛媛県に一例、香川県に二例、徳島県に一例と瀬戸内海周辺にも分布していることが注意される。このような分布は、後述する歴史的背景を考えるうえで示唆を与えてくれるものである。

二、 漁民と船乗りと鴻池

まず、主人公である貧しい蛸取りが結婚する娘の出身だが、単に「長者の娘」とする例は三三例のうち六例であるのに、「鴻池の娘」や「大坂の鴻池の娘」とする例が一五例見られる。鴻池とは、江戸時代の大坂の代表的な富豪であり、主人公の結婚相手をわざわざ「鴻池の娘」と限定していることは、この昔話と大坂との深い関係を示すものではなからうか。

ところで、一七世紀後半に日本海沿岸から関門海峡を経て瀬戸内海を通じて大坂に至る西廻り航路が、河村瑞賢によって開発され、後に航路が陸奥や松前まで延長されたことは広く知られている。^(三七)先に述べたこの昔話の分布は、西廻り航路のコースとほぼ重なって

おり、この航路の終点は天下の台所と呼ばれた大坂である。西廻り航路を通じてさまざまな文化の交流があったことが指摘されているが、この昔話もそうした一例ではなからうか。たとえば、事例三〇は四国の山間部の事例であるが、金持ちになった主人公は昆布を一船こしらえて嫁の実家に行くと言われている。昆布は松前から大坂に西廻り航路で運ばれる代表的な商品なのである。^(四〇)

次に、長者の娘と結婚する男の職業について検討する。主人公の男の職業が蛸取りや魚屋ではない事例は、形態が同一でも取り上げないという最初の方針のために、当然のことであるが、蛸を取っている漁師であるとはっきり語っている例が二〇例ある。このほかに、蛸を取っているとは語ってなくとも主人公の名前が「蛸取り」とか「蛸釣り」などとなっている例が二例、「蛸屋」となっている例が四例、「蛸」とする例が一例ある。また、「蛸取り」や「蛸釣り」という名が付いてなくとも、職業を魚取りとする例、いりこ売りとする例、浜に小屋掛けしているという例が各一例ある。これらの事実は、この昔話が漁民に深い関係があることを示している。

以上を総合すると、この昔話は漁民や船乗りの間で生まれ、西廻り航路の船乗りたちによって各地に伝えられたものと推測されるのである。

三、 米屋甚助の出世譚

『川渡甚太夫一代記』(以後『一代記』と呼ぶ)という、幕末に西

廻り航路の船頭として活躍した人物の自叙伝がある。^(四一) 甚太夫は、文化四年（一八〇七）に若狭国三方郡久々子村（現在福井県三方郡美浜町久々子）に生まれ、弘化三年（一八四六）には自ら船を購入して西廻り航路の船頭となり、慶応四年（一八六八）まで出羽の酒田と若狭の間や松前と大坂の間を何度も往復した人物である。

『一代記』には甚太夫のさまざまな体験談や見聞が記されているが、特に興味を引く点が二つある。一つは、甚太夫の家が農業のほかに漁業や金融業も営み、甚太夫自身も久々子湖でウナギ漁をしたり、ウナギを買い集めて京都まで運搬して販売したり、金融業を営んだ後、西廻り航路の船頭になっていることである。農民や漁民や船乗りや商人というと、それぞれ別個の職業としてイメージしやすが、実際にはこれらの職業の境界はあいまいなのである。「蛸長者」の昔話が漁民や船乗りの間に生まれたのではないかという点を先に述べたが、漁民と船乗りという二つの職業をあまり厳密に区別する必要がないということになる。

もう一つは、『一代記』に登場する米屋甚助という人物の出世譚である。但馬国城崎郡瀬戸村（現在兵庫県豊岡市瀬戸）の米屋甚助は財産を失い女房子供と小屋掛けしている。あるとき、越後今町（現在新潟県上越市直江津）から大坂までの航海に船乗りとして雇われる。越後今町に停泊しているとき、甚助は船頭の許しを得て信州の善光寺へ参詣する。そのとき同宿の娘が腹痛を訴える。ところが甚助の差し出した薬を飲ませると腹痛は治り、甚助は一〇両の礼をもらい、家に尋ねて来るように言われる。船に戻った甚助は一〇

両で米を買い大坂で二二両で売る。その後、江戸の助けた娘の家を尋ねると、娘の家は弾左衛門の家で大富豪である。甚助は弾左衛門から三千両を借用して船を買って廻船業を始めると、繁盛して八万両の身代になる。

この話は、甚太夫が船頭をしているときに船乗りたちから聞いた話を記録したものではないかと考えられるが、地名や積荷の種類・買値・売値などがきわめて具体的に記されており、実際にあった出来事と意識されているようである。^(四二)

甚助の出世譚は、甚助に女房や子供がいる点など、「蛸長者」の昔話とは相違点もあるが、貧しい船乗りが富豪の援助で長者になるという部分は共通している。甚太夫が船頭を勤めていた時期にこのような話が船乗りの間に広く流布していた可能性があるということも、「蛸長者」の昔話が漁民や船乗りの間に生まれたという推測を支持するものであろう。

なお、一七世紀に遡ると、井原西鶴の『世間胸算用』に鮎売の八助という貧しい魚屋が登場する。八助はふだんから蛸の足を七本にしてごまかして売っていたのが大晦日に六本にして売ったのが露見して「足ぎり八すけ」と呼ばれるようになったという人物であり、「蛸長者」の昔話とは直接の関係はないと思われる。ただし、蛸を売る者は貧乏だというイメージは当時からあったのかもしれない。

四、伊勢参りでの出会

次に主人公が長者と知り合いになって娘を嫁にもらうことになつたきつかけを検討する。三三例のうち特に言及しないのが一七例あるが、旅というのが一例(事例二)、上方見物が一例(事例五)、上方参りが一例(事例一八)、伊勢参りが五例(事例七・二四・二五・二九・三一)、金毘羅参りが二例(事例一九・二八)ある。社寺参詣、特に伊勢参りが主人公が長者と知り合う機会となっている。これは先に述べた甚助の出世譚で甚助が善光寺に参つた際に弾左衛門の娘の腹痛を治したこととも符合する。

江戸時代には庶民の経済的な向上にとまって遠方への社寺参詣が一般化したことが指摘されているが、これも「蛸長者」の背景となつてゐることが理解されよう。そして、社寺参詣は、貧しい漁民や船乗りが長者と知り合うという、日常生活では起こり得ないことが起きるのにふさわしい場と考えられていたのである。

ところで、事例七では主人公は伊勢神宮で「ありつたけのお金をはたいてお神楽をあげるといふ気前の良い所を見せました。」とあり、また事例二四でも爺は伊勢神宮で「一生懸命銭をため百両の寄付をする。」とあつて気前良く金を使つてゐるが、これは鴻池をだますための手段とだけ見なすべきではなからう。伊勢参りの際には、出発の際にも、神宮に到着してからも要所々々で撒き銭をする慣行があり、二両以上も撒き銭をした例があつたことが指摘され

(四四) ている。事例七や事例二四のような浪費も、撒き銭でこそないが、伊勢参りの作法になつた行動でもあることに注意したい。

おわりに

「蛸長者」の昔話は、巨視的に見れば、御伽草子の「物くさ太郎」以来の「炭焼長者」にもつながる、貧しい田舎の男が都市の女と結ばれ出世するという物語の伝統を汲むものだと考えられる。しかし、それと同時に、大坂を中心とする海上交通の発達、伊勢神宮をはじめとする社寺参詣の広がりという江戸時代の社会・経済の特徴が色濃く投影した昔話なのである。

△注△

(一) 関敬吾『日本昔話大成』全一二巻、一九七八〜一九八〇年、角川書店(「蛸長者」の代表話例・類話・出典は第二巻、三〇〇〜三〇四ページ)。稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観』全二九巻、一九七七〜一九九〇年、同朋舎。

(二) 関敬吾は「この昔話の主人公が何故にいさばであり蛸釣であるか、あるひは彼等がもと魚の行商を行ひこれらの運搬者であつたかも知れないが、私にはまだ説明が出来ない。」と述べ(関敬吾『日本昔話集成 第二部 本格昔話 一』、一九七四年、初版は一九五三年、角川書店、二三六ページ)、岩瀬博は「新潟、島根、香川、愛媛、大分県の採集例では娘の実家を大阪の豪商鴻池

家と言ひ、その他の採集例で大阪の蛸捕りと言うのは、本話の発生地を大阪とする、あるいは本話の伝播を大阪に出入する廻船によるものとする示唆を与えてくれるようである。」と指摘している(岩瀬博「蛸長者」の項、『日本昔話事典』一九七七年、弘文堂)。

(三) 『昔話研究』二巻二号、三二二ページ。川合勇太郎『青森県の昔話』一九七二年、二〇三ページ、小井川靖夫採話。

(四) 能田多代子『てつきり姉さま』、一九五八年、未来社、一〇五〜一〇七ページ。川合勇太郎『青森県の昔話』、一九七二年、二〇三〜二〇五ページ、津軽書房、能田多代子採話。

(五) 『昔話研究』二巻二号、三三三ページ。川合勇太郎『青森県の昔話』、一九七二年、津軽書房、二〇三〜二〇五ページ、菊地久雄採話。

(六) 『協野沢村史民俗編資料集』一九八三年、協野沢村役場、二五ページ、

(七) 川合勇太郎『青森県の昔話』一九七二年、津軽書房、二〇七ページ、夏堀謹二郎採話。

(八) 宮本朋典『木造町のむがしコレ集』一九八四年、木造町教委、一〇〜一二ページ。

(九) 斎藤正『津軽昔話集』一九七四年、岩崎美術社、一八〜二一ページ、久保孝夫採話。

(一〇) 『日本昔話通観 第二巻 青森』、一九八二年、同朋舎、一一六ページ。なお、『大成』第二巻の「蛸長者」の記述には混乱

があることを指摘しておく。ここでは代表話例として本文そのままが一例、あらずじが二例あげられているほかに、『てつきり姉さま』に一例、『青森県の昔話』に四例の事例があると出典があげられ、計八例の事例があることになっている。ところが、原典に当たってみると、『大成』の代表話例と『てつきり姉さま』の一例と『青森県の昔話』の一例は同一であり、『青森県の昔話』の二例は、すでに『大成』にあらずじがあげられている事例と同一であり重複している。したがって、重複分を除外すると『大成』による青森県の「蛸長者」の事例の数は、実際には代表話例として本文所載一例・あらずじ所載二例・出典のみ所載一例で、計四例となる。

(一一) 岩手出版『岩手民話伝説事典』一九八八年、岩手出版、一五二ページ。高橋貞子『岩泉の昔ばなし 昔なむし』一九九一年、熊谷印刷出版部、三六六ページ。

(一二) 今村義孝・今村泰子『秋田むがしコレ第二集』一九六八年、未来社、二〇〜二〇五ページ。

(一三) (一二)と同じ、二〇五〜二〇八ページ。

(一四) 丸山久子『佐渡国仲の昔話』一九七〇年、三弥井書店、八五〜九一ページ。

(一五) (一四)と同じ、一九九ページ、山本修之助採話。

(一六) 鈴木棠三『佐渡昔話集』一九七三年、三省堂、五二〜五四ページ。

(一七) 水沢謙一『昔あったてんがな』一九五六年、長岡史蹟保

存会、一八二〜一八四ページ。

(一八) 伊藤太郎『犬に吞まれた嫁』一九七三年、巻町役場、二九〜三〇ページ。

(一九) 岩倉市郎『南蒲原郡昔話集』一九七四年、三省堂、一〇一〜一〇二ページ。

(二〇) 佐久間惇一『北蒲原昔話集』一九七四年、岩崎美術社、七四〜七五ページ。

(二一) 新潟県立村松高校社会クラブ『五泉の民話』一九六八年、中村書店、一八三〜一八八ページ。

(二二) 村松町史編纂委員会『村松のむかし話』一九八〇年、村松町教委、七二〜七四ページ。

(二三) 稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第一〇巻 新潟』一九八四年、同朋舎、三三九ページ。

(二四) 上野勇『利根昔話集』一九七五年、岩崎美術社、三二〜三五ページ。なお、須藤澄子『おばあんの昔話』(一九八〇年、煥乎堂、五一〜五九ページ)にも同一の語り手のほぼ同じ内容の事例が記載されているが、「越後の野積ヶ浜」が「ある所の海辺の村」に、「奥州の本間久四郎という長者」が「山の村のあるでえじんの家」になっている。

(二五) 浅川欽一「上倉さわさんの話―下―」(『信濃』二四巻九号、一九七二年)。浅川欽一『奥信濃昔話集』一九八四年、岩崎美術社、六三〜六七ページ。浅川欽一『信濃の昔話第二集』、一九七六年、スタジオオゆにーく、二九〜三八ページ。なお、『大成』第二

巻の「蛸長者」の記述では、『信濃』二四巻九号の事例と『信濃の昔話第二集』の事例が別の事例として扱われているが、同一の事例である。

(二六) 稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第一八巻 島根』一九七八年、同朋舎、二二七〜二二八ページ。

(二七) 島根県立隠岐島前高等学校郷土部『島前の伝承』二号、一九七六年、三一〜三五ページ。

(二八) 酒井董美『魚屋と山姥』、一九八〇年、桜楓社、一一〇〜一一四ページ。

(二九) 島根大学昔話研究会『島根県美濃郡匹見町昔話集』、一九七六年、自刊、一〇二〜一〇三ページ。

(三〇) 武田明『佐柳島・志々島昔話集』、一九七三年、三省堂、五〜七ページ。

(三一) 武田明・斉賀保子『さぬき詫間の民話』一九九三年、詫間町教委、一六〜一七ページ。

(三二) 武田明『井内谷昔話集』一九七三年、三省堂、一一四〜一一五ページ。

(三三) 関敬吾『日本昔話大成第二巻』一九七八年、角川書店、三〇二ページ、武田明採話。

(三四) 鈴木棠三『くったんじじいの話』一九五八年、未来社、八九〜九二ページ。

(三五) 下野敏見『種子島の昔話一』一九八〇年、三弥井書店、一一九〜一二一ページ。

(三六) 宮本又次「鴻池家」の項(『国史大辞典』第五卷、一九九一年、吉川弘文館)

(三七) 古田良一『河村瑞賢』、一九九五年、吉川弘文館。

(三八) 「西廻り航路」のほか「北前船」という言葉があるが、ここでは使わない。その理由は、「少なくとも天保時代の大阪では、北国の船で北前航路につく船を北前船とよび、大阪の船で同じ航路につくものとは区別していたと考えられる。」(牧野隆信『北前船』、発行年不明、教育社、五五ページ)とあって、「北前船」では範圍が狭すぎると考えたからである。

(三九) たとえば、北見俊夫は、地震や山崩れによって港が埋もれたという伝説や八百比丘尼伝説が北前船などによって伝えられたこと、西廻り航路に限らずさまざまな航路を通じて多くの民謡が全国に伝えられたことを論じている。北見俊夫『日本海島文化の研究』、一九八九年、法政大学出版局、三八五～四一四ページ。

(四〇) たとえば、北前船が蝦夷地や東北地方から大坂に運ぶ物について、「ほとんどが海産物で、(中略) 鯨・メ粕・数の子・昆布・鱒粕といったもので」とある。(三八)に同じ、一一八ページ。

(四一) 師岡佑行編注解説・師岡笑子訳『川渡甚太夫一代記』、一九九五年、平凡社東洋文庫。

(四二) 甚助の出世譚の冒頭には、「是より立春の嘶事」とある。「嘶事」を口承文芸のジャンルのどこに位置付けるかは、興味深いテーマとなるだろう。

(四三) たとえば、深井甚三『江戸の旅人たち』、一九九七年、吉川弘文館。

(四四) (四三)に同じ。七八～八〇ページ。

付記

本稿は、日本口承文芸学会一九九七年度大会の研究発表で「漁民の伝えた致富譚―『蛸長者』の昔話」と題して発表したものの一部である。発表に際しては、参加者各位から有益な質問や教示をいただいた。厚くお礼申し上げる。なお、発表では、「蛸長者」と「炭焼長者(初婚型)」・「難題簞」・「宝化物」との関係についても述べたが、紙幅の関係もあり、これについては別の機会に述べたい。

(おおしま・よしたか/静岡県立池新田高校)